京都 KYOTO

不思議ふしぎ!?

京都に隠れた意外な秘密を紹介します

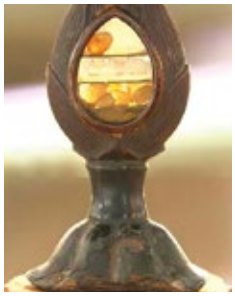
「お火焚」の秘密は饅頭にあり!?

本号がお手元に届く頃、京都の神社では「お火焚」という祭が行われています。この祭の代表格ともいえる伏見稲荷大社では井桁に組み上げた火床に火焚串を積み、豪快に焚き上げます。五穀豊穣に感謝する神事とされていますが、実はこの行事ほど日本人の信仰の多様性と変遷を示すものはなく、その秘密がお火焚で配られる「お火焚饅頭」の焼印に残されているのです。焼印は「火焔宝珠」。

宝珠を炎が包む図柄です。

お火焚風景　伏見稲荷大社

お火焚饅頭　中村軒



宝珠（仏舎利）
近年薬師寺東塔から
発見され話題を呼んだ。

宝珠は密教秘法の一つである請雨法、つまり雨乞い儀式の本尊として知られますが、皆様は数ある真言秘法のなかで最重要秘儀である「後七日御修法」をご存じでしょうか？　もともと空海によって宮中の真言院で行われた玉体加持で、後に東寺に移されましたが、この秘儀の本尊が宝珠で、その正体は実は「仏舎利」、つまりお釈迦様の骨で、これは日本人の主食である米の象徴なのです。仏舎利は骨の粒で米そっくり。今も白米を銀シャリなどといいますね。

天皇の息災を祈願する東寺の御修法は、玉体の健康を支える食、つまりコメの豊作を祈願するものであり、それが五風十雨の順行を祈る雨乞いとなり、その雨を支配する龍神に繋がります。龍は顎に宝珠を宿すとされます。さらに火焚串は密教の護摩木がルーツで、今も山伏がこの任に当たるところもあります。これを焚き上げることは炎が天空に飛昇する龍の姿を表わし、火焔宝珠はその象徴なのです。

そしてこのコメの収穫を司り、新穀を保管する「御稲御倉」のカギを預かるのが伏見稲荷であり、お使いである狐がカギと宝珠を咥えることになるのです。伏見稲荷大社にはもと愛染寺という真言密教の寺院がありました。実は仏舎利（宝珠）は愛染明王の秘法の本尊でもあるのです。

この御修法が、庭燎を焚いて神を招き災厄除去を祈願した宮中の風習と習合し、民間に降りてお火焚となりました。お火焚は少し前まで庭先、あるいは往来で行う子供たちの健康を願う家々の習俗でした。京の風俗を描いた「洛中洛外図屏風」にはその様子が描かれています。

現在お火焚に饅頭やおこし（興し米）が配られ、蜜柑を焼いて風邪封じを願うのはそのため。少子化や町内行事の過負担から見られなくなったこの風習ですが、絵の如く子供たちの明るい笑い声とともに活気が戻り、京の辻々で再び目にする日が来るといいですね。

（京都学園大学非常勤講師　堤 勇二）

上）宝珠を咥える狐　下）カギを咥える狐
伏見稲荷

往来のお火焚（新町通）
上杉本「洛中洛外図屏風」左隻より
寒中ゆえか、お尻丸出しで暖を取る子供が（笑）

歴史や文化、全てが源流へとたどり着く古都。
京都を知ることは日本を理解すること。

京都好きを大好きに

京都検定
京都・観光文化検定試験
京都商工会議所